

特集「モデル校創立十周年回顧録」

ブラジリア日本語モデル校は、今年創立10周年を迎える。

10月20日には記念式典も予定している。式典では、モデル校生徒全員の作文集を記念として配布する予定である。

回顧録

モデル校 10 周年を振り返り

ブラジリア日本語モデル校校長 三分一貴美子

「初志貫徹」「初心忘れるべからず」とは古くから言われております。10年経ったということに未だ実感が湧いてこず、年月の過ぎ去ることの早さに驚きを覚えます。

さて、10周年のモデル校落成式並びに開校式の挨拶文を読み返してみると、その当時の〈思い出〉が今に伝わってきます。

ここに開校式の挨拶文を紹介します。当時は生徒数も多く新しい学校体制の組織をどう取り組むか等、課題は山積みでした。現在と比べますとやはり10年の歩みはそれだけの価値を物語っていると確信できるでしょう。教師陣も半分ぐらい入れ替わっておりますが、各人が使命を自覚し熱意をもって努力したからこそ、今日があると思うのは私一人、だけでしょうか。

地域のみならず、家族の支えも見逃すことはできません。心から感謝申し上げます。

更に地域の関係者のご支援も決して忘れてはおりません。10周年を迎えた今日、改めて深く感謝の意を表します。ありがとうございました。

《ブラジル日本語モデル校 - 開校式挨拶 - 》

本日、ここにブラジル日本語モデル校の開校式を挙げるにあたり、公私ともにご多忙にもかかわらず、日本大使館文化班三井書記官殿、JICAブラジル事務所斉藤所長殿、小松次長殿、その他文化協会関係者方々のご臨席を頂きましたことは誠にありがたく光栄の至りに存じます。厚くお礼申し上げます。

このモデル校の落成式は去る5月17日に盛大に挙行されました。そして前身のみどり学園の精神を生かした開校を目指して準備を着々と進めまして、本日のめでたくも晴れやかな開校式を迎えることができました。これはひとえにJICAの温かい助成金の賜であり、そして又関係者皆様の献身的な協力によるものであります。

諺に「仏つくって魂入れず」とありますが、諺の通り何が大切かを忘れないように、今後は内容充実に尽力したいと思います。先に作成した実行計画書をもとにクラス編成には特に力を入れ、会話中心、読解中心、さらに目的ニーズにあったクラスをと心がけ、上級講座は各々の目標にあわせクラスを設けました。普及協会の研修会等、地域性も十分考慮しながらこのモデル校ならではのことを配慮いたしました。なお、日本文化理解の一環として、生け花教室をはじめ書道教室も設けることができました。

そしてまた、モデル校の施設の面では、重要項目のひとつとして教室に視聴覚機器を備えることができました。これは今後、教師養成のための教授法、指導法の研究に生かしていく所存です。これもJICAからのモニター施設助成金によるものであり、本日の公開授業はこのモニター施設を生かしたものであります。この施設は全教師が待望していただけに喜びもひとしおの感がいたします。このほか、JICAよりはシニア専門家派遣、開発青年派遣を受け、感謝にたえません。

私たち教師一同はこのモデル校が名実ともにブラジルそしてブラジルの日本語教育の重要な拠点となるよう、全教師が一丸となって努力する所存であります。

私たちの今後の学校運営の歩みをどうか温かく見守っていただき、時には厳しくご指導、ご鞭撻くださるよう切にお願いします。最後に本校の今後の益々の発展を祈りながら租辞でございますが、きょうの式辞といたします。

1992年8月3日

学校長 三分一貴美子

(「ブラジル日本語普及協会 10年史」76ページより抜粋)